

心を育てるNIE

～人の思いや生き方を学ぶ～

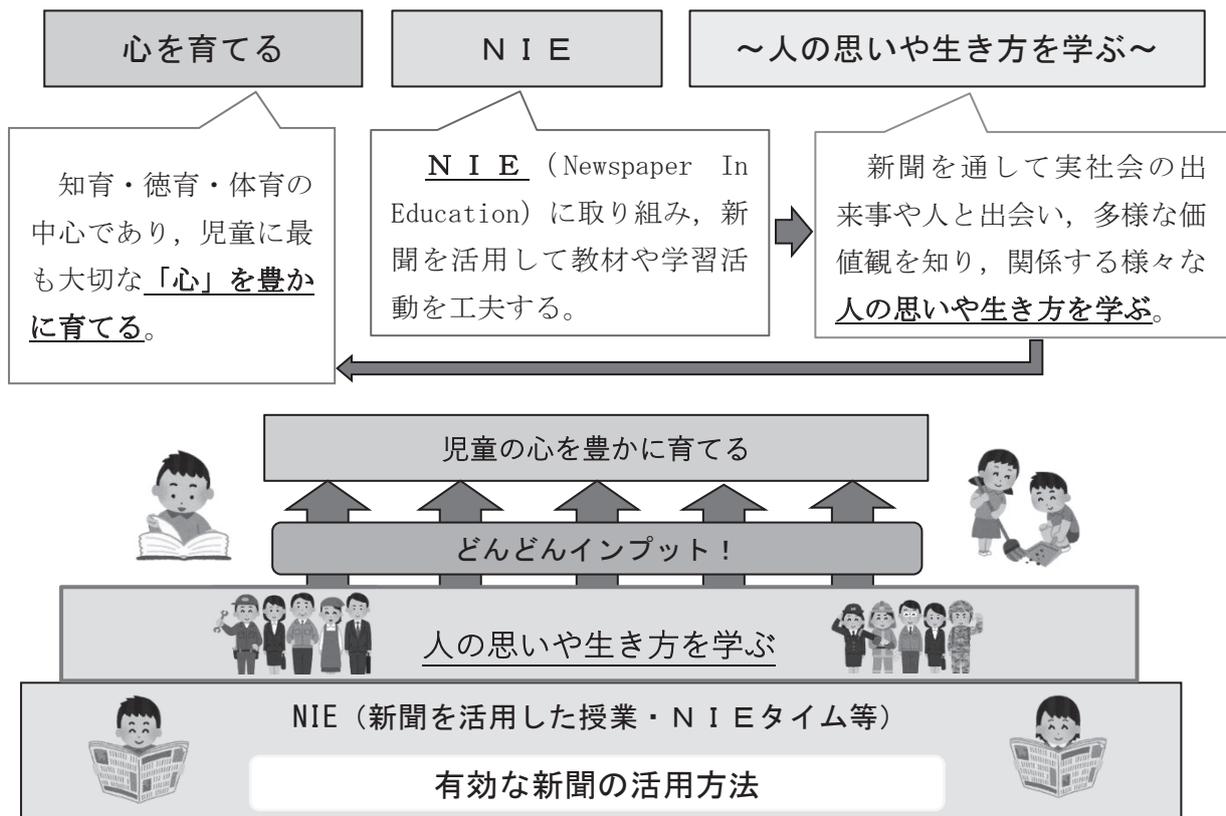
新発田市立御免町小学校

1 NIE実践のねらい

今年度も昨年度と同様に、新聞の活用を図り、「人の思いや生き方を学ぶ」ことを通して児童の心を育てることに取り組んだ。

NIEの取組1年目は、新聞記事をどのように活用できるのかを探り、実践を積み重ねた。児童にとって新聞は、決して「身近な存在」ではなく、新聞と児童を近づけるための工夫について提案し合い、有効な活用の仕方が見えてきた。しかし、新聞から人の思いや生き方を学ばせることには課題が残った。

NIEの取組2年目は、教育課題を克服するために、記事中の人物の思いや生き方を、より深く学ばせるよう、新聞を活用することだけでなく、学級経営や授業の組み立て方などを根本的に見直し、この研究が、あくまでも子どもたちを育てるためのものであることを確認し合い、研究を進めた。



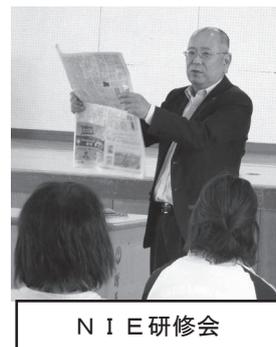
2 本年度の実践の概要

(1) 職員研修

1学期に、当校の藤井聡校長を講師として、「NIE研修会」やNIEと関連付けた「学級経営研修会」等を実施した。

「NIE研修会」においては、基本的な新聞の活用の仕方を学び、職員で共通理解を図った。藤井校長はNIE初期の実践者でもあり、新聞を活用した道徳の授業づくりなどを具体的に学ぶことができた。授業づくりにおいて「児童の思考の流れを大切にすることが第一である。思考の流れを大切にして授業をつくるポイントは2つある。1つは、どこで記事中の人物と出会わせるかである。もう1つは、拡散と収束を意識して発問の組み立てを考えることである。」という指導があり、日々の授業づくりの基礎となった。

そして、学級経営についての「常日頃から、人・友達・周りの人など自分とかかわりのある人に目を向けさせ、その人の思いや生き方について話題にしていくことなどの、地道な積み重ねが必要である。」という指導を、常に意識して実践に取り組んだ。



(2) NIEの実践と情報の共有・蓄積

① NIEコーナー（掲示板）

児童玄関正面に、NIEに関する掲示板を設けた。取組の前半は、教師が児童に紹介したい記事を掲示し、児童が新聞への興味をもてるように工夫した。取組の後半は、研修会での学びを取り入れた実践や、提案授業での成果を生かした追試実践など、一人一人が行った実践をNIE掲示板で紹介し合い、成果の共有を図りながら実践を積み重ねた。



自分と同じ夢に向かってがんばる小学生に共感したり刺激を受けたりした。記事中の小学生から学んだことを「手紙に書く」という活動を通して、自分自身を振り返ったり、学んだ生き方を生かして自分を高めようとする心を育むことができた。

戦時中の小学生を取り巻く環境を知り、「ちいちゃん」のように、命や幸せな生活を奪われた子どもたちに思いを馳せることで、現在の平和の大切さを感じる心を育んだ。物語と児童の距離を縮め、登場人物の心情を深いところまで読み取る学びにつながった。

写真の中の試合に負けて泣きじゃくる選手に焦点を当てた。選手の思いを理解することで、選手の思いや生き方から、責任感や仲間を思う気持ちの、より高い価値観を学んだ。児童の内面は変容し、児童自身に、失敗を恐れずに挑戦しようとする意欲が高まった。

(3) 授業研究

6回の授業研究会を行い、授業後の協議会には職員が全員参加し、「人の思いや生き方を学ばせる」ための手立てについて成果と課題を出し合った。そして、その課題についての校長から指導を、追試するなど各学級の実践につなげた。研究会では、明らかになった有効な手立てを取り入れた授業を提案した。

実施した実践は以下の通り

学年	教科	単元名等
4年	道徳	一皿に込める郷土愛
3年	道徳	金魚台輪でゆく夏惜しむ
5年	道徳	挑戦する姿勢への共感
特別支援学級5組	自立活動	絵手紙つづり 1万枚
2年	生活	生きた文化財絶やさぬ
6年	総合的な学習の時間	金魚台輪でゆく夏惜しむ
1年(11月26日研究発表)	生活	かぞくにこにこ大作戦
4年(11月26日研究発表)	道徳	「台風の子」希望乗せ 2歳
6年(11月26日研究発表)	総合的な学習の時間	わたしのふるさと新発田

有効な手立ては、以下の通りである。

記事中の人物との距離を縮めるために

- ① 本時のねらいに迫るために、記事では表現されていない思いや生き方などを補う必要がある。
- ② 児童が記事中の人物に質問したいことを取りまとめ事前に取材しておく。
- ③ 記事中の人物に実際に出会い、直接触れ合う。または、手紙や電話などで触れ合いの機会をもつ。

人の思いや生き方を深く学ばせるために

- ① 記事中の人物に向けて手紙を書くことや、その人の生き方をまとめるなど、児童に記事中の人物の視点で考えさせる。
- ② 自分の体験と記事中の人物の行いを重ね合わせて考えさせる。
- ③ 見出しに着目させる。多くの実践において、児童の考えの手掛かりになるものは、「見出し」にあった。これは、見出しが、記者が伝えようとしていることを一言で表現したものであるからである。児童の思考の収束の場面で、見出しに着目させたことは、有効であった。

(4) N I E の環境整備と情報の共有

① 新聞棚

昨年度職員室に設置した棚の他、児童玄関前にも棚を設置し、児童が自由に新聞を手にとって活用できるようにした。



② 新聞スクラップコンテストへの応募

昨年度以上に多くの児童が挑戦した。9名の児童が入選し、団体賞も受賞した。



3 実践例

(1) 実践例1 1年 生活 「かぞくにここに大作戦」

① ねらい

写真から感じたことをもとに、すごろくを作ることができる。

教師が取り上げた写真について感じたことを交流する活動を通して、記事に関わる人の思いに気付くことができる。

② 使用した新聞記事

「災害時の食事 大切さかみしめ」(新潟日報 2021年11月6日)

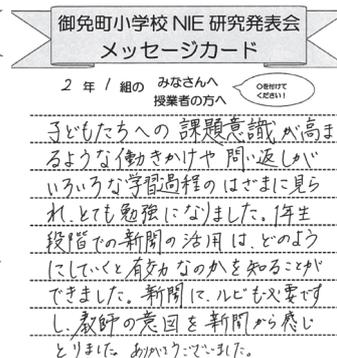
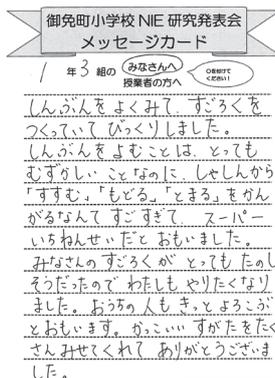
③ 授業の実際

1年生には、漢字が多く言葉が難しい新聞記事から人の思いや生き方を読み取ることは難しい。しかし、授業者が、写真や見出しを手掛かりにすれば人の思いや生き方を推し量れると考え設定したすごろく作りを通して、1年生児童は楽しみながら、「自分で考える力」の基礎をしっかりと培っていた。

協議会では、人の思いや生き方の学ばせ方について、本時でのすごろく作りの是非が協議された。授業者は、大研で検証された「思考が収束されるときに一番深く考える」という成果を、この授業の組み立てに生かした。導入のすごろく作りで児童の思考を拡散させ、一枚の写真提示で思考の収束を図ったのである。その結果、教師の写真提示の場面で、「子どもたちが集中した」「一番よく考えていた」「心が大きく動いた」など、参観者の見取りから紹介された通り、児童の主体的に学ぶ姿につながった。

また、その場面で、「おいしそうに食べているから進む」「食べることに夢中になっているから休む」など、写真の表情から人の思いを推し量ったことは、人の感情を理解する心を育むことにとっても有効だった。この学びは、「相手に対する思いやり、配慮に欠ける言動が稀に見られる」という当校児童における教育課題克服に直結する。これから学年が上がり自分を取り巻く社会が少しずつ広がったとき、良好な人間関係を築くための基礎になる学びであると考えます。

そして児童は、推し量った思いをもとに、「進む」のか「戻る」のか「休む」のかを真剣に考えていた。写真や見出しを手掛かりに価値判断をしていた。防災給食を前にした人物の思いを自分事にさせるために、田邊教諭は食材を手にとらせた。その体験から児童は、「家にもある」「学校の帰り道、干してあるのを見た」と日常生活と結び付けて考えることができた。自分で考えて決めるといふ、自分で自分の人生を生きるときに一番大切なことをこの授業で学んでいた。



(3) 実践例3 6年 総合的な学習の時間「わたしのふるさと新発田」

① ねらい

取り上げた新聞記事中の人物の言葉や今昔の比較から、店や町の様相が変わっても変わらずに流れる人物の「思い」をとらえ、人の「生き方」について考える。

② 使用した新聞記事

「晴れの日彩る米沢牛」(新潟日報 2010年8月18日)



③ 授業の実際

石塚学級の児童は、記事中の人物の思いや生き方を深く考え、そこから学んだことを自分の生き方に生かそうとしていた。御免町小学校児童の課題の1つである「主体性」を目指して学ぶ姿があった。授業の随所に「人の思いや生き方」を学ぶ意味、学ばせ方について我々教師が参考にすべきポイントがあった。

新聞記事の見出し『晴れの日彩る』を手掛かりに、児童は、八木の女将さんの生き方を次々に自分の言葉で語っていた。なぜ、女将さんについて語ることができたのか？それは女将さんの生き方が素晴らしいというとらえをしていたからである。「八木の女将さんの人柄に触れている」「八木のカレーを食している」という体験があることからだ。つまり「活動」を通しての学びが、女将さんの思いや生き方を学ぼうとする「意欲」につながった。発言が途切れなかった、あの学びの姿がそれを物語っている。

本時の授業において、児童の思考を収束させ、女将さんの思いや生き方を深く考えさせた発問がある。それは、「でも、君たちが食べたのはカレーだよ」という問い掛けである。その時、教室は静まりかえった。この児童の沈黙には鳥肌が立つ思いだった。本気で考える姿を目の当たりにしたからである。学ばせたい人の生き方を取り上げる記事の選定、記事に近付ける活動の設定、そして児童の思考を揺さぶる発問が、児童を深く考えさせ、学ばせていた。

その後、児童は、カレー作りに見られる女将さんの思いを推し量り、「私たちにとって晴れの日のごちそうである」という結論を導き出した。なぜ記事に表現されている以上の思いを推し量ることができたのか。それは自分に関わる人たちを大切にできる心が育っているからである。自分に関わる人たちを大切に作る心、これは一朝一夕に育つものではなく、石塚教諭が大切に育んできた心である。その心は時として、人の生き方を変える力がある。毎日の授業を通して、児童は成長する。そして体験を加えることによって、その成長は深くて確実なものとなる。新聞記事に記された見出しや、わずかな手掛かりを見逃すことなく、児童と出会わせたことによって、本授業は参観者を唸らせるものとなっていた。

御免町小学校 NIE 研究発表会
メッセージカード

6年 / 組の みなさん 授業者の方へ お便りください!

皆さんが、真剣な眼差しで、授業に取り組んで
いる姿に感動しました。一人一人、自分の考えを
思いを心に込めて話し、本当に素晴らしい
です。今日の授業は、八木の女将さんの思いに
対して授業でした。みなさんが、様々な視点から
「あんなに、のびのびと、自分の言葉で語り、
うい、友達の言葉や思いに耳を傾けました。
このよは、こわからの社会を学ぶ子どもは、
よく大切にされたと思えます。人の思いに
耳を傾け、友達と協力して課題を解決し、
そのよは、みんなの力を合わせて、
このよは、みんなの力を合わせて、
このよは、みんなの力を合わせて、

御免町小学校 NIE 研究発表会
メッセージカード

6年 / 組の みなさん 授業者の方へ お便りください!

人の心はよく分かりません。でも、その
言動や行動で、心を感じることが
できます。八木のおかみさんの心を感じ取
れたのは、心か育っています。授業
の中の発言、発言だけでなく、態度を見
れば分かります。すばらしいです。
藤井校長先生が、自慢の子たちで
と、おっしゃっていました。そのよは、
すばしい。と同時に、みなさんに、
校長先生、ごうい、おい、自慢し合
御免町小学校は、い学校、最高、
これからの、自分の言葉で、誰かのために、
強く、優しく、挑戦して、生かす、

4 成果

N I E 研究をふりかえって

研究会では、参観者の方々から、児童が主体的に学んでいる姿を高く評価していただいた。閉会式では、新聞から「人の思いや生き方」を学ぶことの有効性を評価していただくとともに、活動を通して学ぶから主体的に深く学べるのだと、研究の論理と構造の素晴らしさを価値付けていただいた。

2年間の研究を終えようとする今、児童の姿に、たくさんの変容を挙げることができる。

挨拶が変わってきた。登校して出会った人や、廊下ですれ違った人と、気持ちのよい挨拶を交わす姿が日常的に見られるようになった。あいさつ運動などで「呼びかけられている挨拶」ではなく「自分から進んでする挨拶」に変わっていった。自分で考えるようになったからである。目の前にいる相手を思って挨拶する。それは、児童にとって主体的な一日の始まりである。

挨拶に続く朝の放送では、担当委員会の児童が、自分で原稿を書き、自分の言葉でメッセージを伝えている。時には、大人も感嘆する内容、話し方である。「自分が学んだこと、感じていることを全校に伝えたい」そんな思いが伝わってくる放送に変わっていった。

また、普段の生活の中で、感謝する言葉や温かい言葉が多く聞かれるようになった。それは「人の思い」を学んだからである。行事や授業、活動の中で、見えない「人の思い」を感じ取ったとき、児童は笑顔になり、自然に「ありがとうございます」「うれしい」「がんばります」などの言葉を発していた。そして相手の「思い」に応えようと、自分の生き方について考えていた。そしてよりよい選択をして進んでいったからこそ、一緒に学ぶ友達や自分にかかわる人への態度や言葉が温かいものになっていった。校内で見かける児童の表情は明るく、伸び伸びとしている。

日々の授業の中では、自分の言葉で話せる児童が増えてきた。友達が苦手を克服して自分の考えを話すのを聞く雰囲気は、温かい。自分の言葉で話すことの心地よさを感じた児童は、自分の考えをどんどん発信するようになり、言葉だけでなく自ら行動するようになっていった。その姿は、同じく話すことを苦手としている友達の背中をそっと押していた。

私たちが共同研究に取り組む意義は、個人個人の授業の技量を上げることである。しかし、校長はそこで終わってはならないと言う。児童の成長、変容まで目指すのだと言う。私たちは2年間児童をまん中に置いて研究を進めてきた。そして、その成果を実感している。「子どもは好きな人からしか学ばない」という校長の言葉の意味が今、実感として理解できる。毎日の指導と、体験の積み重ねの中で、児童と教師が信頼を深め、「人の思いや生き方」を共に学ぶ存在として、とらえられるようになったのは、このN I Eの研究に取り組んできた成果と言える。

(星野 敬子)